

## 第 105 回山口西田讀書會

2016 年 3 月 19 日

第 104 回 (3 月 12 日) のプロトコル

参加者：桑原、谷、千葉、橋本、藤村、植田、岡田、田中、山口、佐野 (計 10 人)

第 104 回の哲学的問い：「テキストを読むとはどういうことか。自説に都合のよいところだけ頷いて自説を固めることに利用し、そうでないところは反発するか、読み飛ばす、これはテキストを読んでいることになるのか」について。

この問いについて司会者の方から、山口西田讀書會も 100 回を超え、「山口西田讀書會」について哲学する時期に来ているのではないか、という問いかけがなされた。次いで司会者の方から次のような体験の紹介とともに、問いが具体化された。長年哲学の講義を担当しており、難しい哲学思想を如何に分かりやすく伝えるかに何十年も腐心してきた。学生はうんうんと頷きながら熱心に聞いている様子。こちらもちよく話すことができ、今日はいい授業ができた満足に思う。ところが試験で書かせてみるとまるで理解していない。何も学んでいない。彼らは私の話を「聞いて」いたのだろうか。文字の場合は「読む」、話の場合は「聞く」。私たちはテキストを詠んだつもりになって何も「読んで」いないということはないだろうか。そうして何故そのようなことが起こり得るのか。

植田氏から「自分の理解の中に落とし込んで読んだ気、聞いた気になっているから読めない、聞けないのではないか」という意見が出され、藤村氏からも「見ているだけで問がないからではないか。テキストと自分の間の戦いを通じて自分なりの答えが出て来ること、これを読むと言ひ、聞くと言うのだ」という発言があった。

岡田氏からは「西田先生の『考えたこと』を知りたい。これが第一段階。それが分かれば次に共鳴することも反発することもできるが、『善の研究』については全部に目を通すことができたが未だに分からない」という感想が紹介されると、谷氏から「読むためには神に対する信仰心を持つことが必要である」、杉山氏からは「本を読むとは本を著して下さった人、テキストの読み方を教えて下さった人に近づくこと、その『人間』を学ぶことである」と、岡田氏のテキストを読む心構え、姿勢に対する異議が提出された。

千葉氏からは「西田先生が使われている言葉は我々が分かる言葉ばかりだが、読んでも分からない。それは言葉にならないものを言い表そうとしているからではないか」という意見が提出された。それに関連して岡田氏が「純粹経験」という言葉の難解さに言及すると、杉山氏が「西田先生は専門用語として用いているのだから、それを日常用語と混同してはならない」と、『善の研究』における用語の問題に言及された。これに対し田中氏は「哲学は日常生活と結びつく必要がある」との反論を提出したが、杉山氏は「西田先生がどのような意味でつかわれているかに即して読むべきであって、自分持ちの理解で読んではならないという意味である」と上述の氏の主張を明確にされた。

これとは別の脈絡で谷氏の「純粹経験を生きる上での柱にしている」との発言に関連し

て、田中氏は『善の研究』は持っていないなくてはならない書であった。何故この書が当時の学生を惹きつけたのかが知りたかった。自分が『善の研究』を読むのは、生きる上での支えを掴みたい、今まで考えてきたこととどう関連しているのか、どう違うのかが知りたいからではないか」と発言すると、議論は読むことの有用性に集中していった。

口火を切ったのは山口氏である。「読んで分かるとは設計して動けばよい」、という工学的な見地から、読めるとは「行動するうえで使える」ことであるとした。岡田氏はこの点について「神は宇宙の根本である、における神を除けば西田先生の主張は使える」と主張。これに対し田中氏は「西田哲学を使う気はない」としたが、「人生観の柱をしっかりとさせたい」という点では西田哲学を使うことになるのではないかと司会者の方から質問が出された。またそのようにして築き上げてきた柱も死などの限界状況では使えないことが暴露されるようなものではないか、死を前にしていくら死ぬための（残された生を生きるための）柱を築いても心から安心して死ぬことができるのか、などの質問も提出された。

藤村氏はこれに対し「人生はひっくり返されてばかりだ。自分が築いてきた柱に対し問い掛け、世界観を止揚しつつ成熟させるという意味で、『善の研究』を読むということは有用であり、使える」とし、それに加えて千葉氏は岡田氏への反論も含め「神は宇宙の根本というのも使える」と主張した。

このようにして「読む＝有用性」説がその場を支配しつつあったが、一人首をかしげ怪訝な顔をしていた植田氏に発言を求めると「読むということを使える使えないという視点でとらえるのは『気持ち悪い』と並み居る年配者相手に果敢に発言。植田氏によればそれは「柱を構築するために読む場合も同様」だというのである。そもそも「そのように使おうとするとフィルターがかかる」、それが氏が最初に述べたように自分の理解の中に落とし込んで分かった気になっているということであり、それが「読めていないことだ」と主張した。これに対し藤村氏は「しかし人間にはそのようにしか読むことができない」と静かに呟いた。司会者の方から弁証法的にどれほど生きていくうえでの柱を築いても死ぬ時には何の用もなさないのではないかと再度質問すると、岡田氏より「人間は生きている間は生きていけるのであり、死ぬ時には死ぬ。みんなそうしてきた。何の心配もいらぬ」と反論。

ここで遅れて登場した桑原氏がこの岡田説に共感の意を表明。さらに植田説を援護しつつ「テキストは誤読を許す。人間は今のレベルでしか読めない。しかしテキストにはそれ以上のことが書かれてあり、人間に穴があく瞬間というものがあるが、それが読めるとのことだ」とこの場を締めくくったが、岡田氏から「それは聖典の読み方だ」との反論があり今回の哲学的問いをめぐる討論の幕が下りた。

今回は今回のテーマに関する佐野の考えを若干述べた後に、植田氏の発表会があることが予告された。

佐野記